「患者のいやしとなる病院」に心を砕いた。そのため設計は機能のみを追求するのではなく、デザインや色遣いに工夫を凝らした

開院わずか6年で脳卒中治療でトップクラス 地域と連携し住民の安心高める

兵庫県明石市

大西脳神経外科病院

大西脳神経外科病院（大西英之院長）は開院してわずか6年目と新しいが、数々の病院ランキング本や名医紹介で常連となる話題の病院だ。ベッド数はわずか82床でありながら、年間600件を超える脳神経外科手術を実施し、脳動脈瘤などの手術件数は兵庫県でもトップクラス。また、開院当初から地域の病医院との連携を進めており、兵庫県東播磨地域の脳卒中医療の中核として、地域医療の向上を目指している。

ロマネスク様式を念頭に置き、アーチ状のデザインを採り入れた。交通量が多い姫路幹線に沿っているため、施設を防音壁が取り囲む。壁は3階・4階部分を連結した回廊でリハビリの場となっている。壁は濃い緑と薄い緑、肌色のタイルを一定の割合で配置したことで優しい感じの淡いグリーンを実現した

4階の回廊には屋上庭園を設けた。患者の憩いの場だ

高度医療機器としてＭＲＩが２台（1.5Ｔ、0.5Ｔ）、ヘリカルＣＴ、アンギオなどを設置している

社会復帰を促すため、急性期リハビリを重視している

正面玄関には知的障害者らが制作した「さをり」（向かって左）と呼ばれる手織りが飾られている。開院前に大西院長が市民ギャラリーで出会い「心の叫びや命の叫びを感じた。必死に何かを訴えかけようとしている」と強烈な印象を受け、購入した

救急患者が搬送される救急処置室

頭蓋底外科など手術は年600件

大西脳神経外科病院を率いる大西英之院長は全国でも五指に数えられる脳神経外科の名医として知られている。脳外科手術の中でも最深部を扱う難易度の高い頭蓋底外科を専門とし、顕微鏡を使用するマイクロサージェリーは実に30年も前から実施していた。

その大西院長が出身地である明石市に病院を開設したのは2000年のこと。以前は大阪警察病院で脳外科部長を務めていたが、ある時地域の脳神経外科医不足を痛烈に感じる出来事があった。自身の母が急性硬膜外血腫で救急搬送されたが、医師がいないなどで受け入れる医療機関がなかったのだ。明石市を含めた東播磨地域は大都市圏の神戸市と姫路市の間に位置し人口は60万人を数える。さらに明石市の北にある神戸市西区を含めると90万人に上る診療圏だが、人口に対し脳神経外科医は極めて少なかった。幸い母は、一命を取り止めたが、この一件が高度医療を提供する病院の開設を決意するきっかけとなった。

同院は現在院長をはじめ10人の医師が在籍し、脳卒中や脳腫瘍、頭部外傷や脊椎・脊髄損傷、アルツハイマーなど脳に関わるあらゆる医療に対応している。救急はＭＲＩ・ＣＴの検査機器を含め24時間365日対応可能だ。2005年の手術件数は608件、救急搬送患者数は1199人に上る。初診患者は増加傾向にあり、１日に50人を超える。これも地域の信頼が高まっている証だろう。

こうした実績が評価され、日本脳神経外科学会認定専門医訓練施設や日本脳卒中学会研修教育病院など各学会の認定や明石市の救急基幹病院指定を受けるまでになった。

技術だけでなく患者が納得できる治療を心がける。予定手術では、術前に脳の活動を画像化するfunctional ＭＲＩの実施や生体脳の神経線維路を描出する拡散トラクトグラフィを行い手術内容について患者と十分に話し合い、手術の流れを確認するため予行演習も行っている。マイクロサージェリーは患者の覚醒下で随時状況を説明しながら手術を実施している。

ファクス１枚で救急受け入れ

平均在院日数が14日前後であるにも関わらず、病床利用率が90%を超える同院。それは急性期病院を目指す中で開院時から力を注いでいる地域連携の成果でもある。地域連携室では、日中に限り、登録医がファクス１枚送れば救急患者の紹介を受け入れるユニークな取り組みを行っている。ファクスでの検査機器の予約は一般的だが、救急患者の受け入れまではそうはない。越智信成主任は「常に臨戦態勢。いつでも・すぐに受け入れられる態勢づくりに努めている」と話す。

また、医療相談室では患者が退院・転院する際だけでなく、外来患者に対する逆紹介の支援活動も

Prehospital Record

明石市消防署の救急隊員が、急病患者に対し使用する「プレホスピタルレコード」。「脳卒中スケール」のうち一つでも異常がある場合は直ちに大西脳神経外科病院に搬送する。また、「脳卒中を疑う5つの症状」は3つ当てはまれば脳卒中が確実だ。救急搬送後の結果に関しては救急隊員に報告している

実施している。患者の症状が落ち着いた段階で、地元の医療機関を紹介し受診を勧める。大西院長は「一つの病院ですべてケアを完了することはできない。急性期からリハビリ、そして在宅・介護へと地域ぐるみの連携が大切だ」と、連携の重要性を説く。このほか地域の医師を対象に年5回開く「東播磨脳神経外科懇話会」も好評だ。

チェックシートで早期に搬送

急性の脳卒中は発症後いかに早い段階で適切な処置を行うかが明暗を分ける。このため、同院では地元消防署の救急隊員とともに「プレホスピタルレコード」を作成し、2年前から運用を開始した。プレホスピタルレコードは患者の発症状況やバイタル、異常所見をスクリーニングし、脳卒中の疑いのある場合は同院に搬送するというチェックシートだ。脳卒中スケールは米国シンシナティで使われているスケールを採用しており、簡単に異常の有無を確認できる。04年度に明石市救急隊が同院に搬送した症例で、外傷などを除く急病患者409例のうち、意識レベルがJCS-2（覚醒しているが見当識障害がある）以下で、脳卒中スケールが陽性だった76例のうち、脳卒中だったのは67例と88.1%の高い的中率だった。プレホスピタルレコード導入後は、明石市の脳卒中や交通事故の死亡率が下がるなど、明確な効果が出始めている。

医師の育成を視野に

同院はこの7月にDPC準備病院となった。またSCU（脳卒中ケアユニット）を近く開設予定で、これによって病院機能を高めるとともに収入の安定化も図ることができるとみている。

今後の目標とするのは脳神経外科医の育成だ。きつい仕事である脳神経外科は後期臨床研修で選択する医師が少なくなっているとされ、全国的な医療レベルの低下が危ぶまれている。大西院長は「自分の技術を後世にも伝えていきたい。そのために当院も脳に関する専門性を発揮できるような態勢を作っていきたい」として、医療が細分化される時代にあって各医師の専門性を生かしたセンター化も視野に入れている。

（本誌編集部・北澤道子）

看護部には主任部長と業務改善特命部長の2人がいる。特命部長は業務改善のほかに患者や職員の相談にも乗っている。看護師が働きやすい環境を作る目的だ

公共交通機関が近くにないため近隣の駅から送迎車を運行している。20分ごとで患者には好評だ

グラフ 北から南から

おおにしひでゆき
大西英之院長

近年「良い医療を受けたい」という患者が増えてきている一方で、医療費抑制という相反する動きが起きている。手厚い看護をすれば人件費が高くなり医療費が上がるのは必然だ。また勤務医の負担が重くなり、脳神経外科を始めきつい科を志望する研修医は減少しつつある。医療のシステムの中で医療者が犠牲になっている。これからの医療をどうするのか、国ははっきりとした道筋を立てなければならない。

大西脳神経外科病院の概要

（06年6月現在）

※05年3月、日本医療機能評価機構の認定取得

診療科目：脳神経外科・神経内科・放射線科・麻酔科・リハビリテーション科

病床数：82床（うちICU4床、HCU4床）

職員数：常勤医師10人、非常勤医師5人、看護師68人、介護福祉士5人、薬剤師6人、放射線技師5人、理学療法士3人など計150人

入院基本料：一般病棟入院基本料10対1

1日平均外来患者数：198.9人

1日平均入院患者数：80.3人

平均在院日数：14.6日

病床利用率：91.6%

所在地：〒674-0064　兵庫県明石市大久保町江井島1661-1

電話：078-938-1238

FAX：078-938-1236

URL：http://www.onc.akashi.hyogo.jp/